



難聴のある児童生徒の 自己理解を深める指導

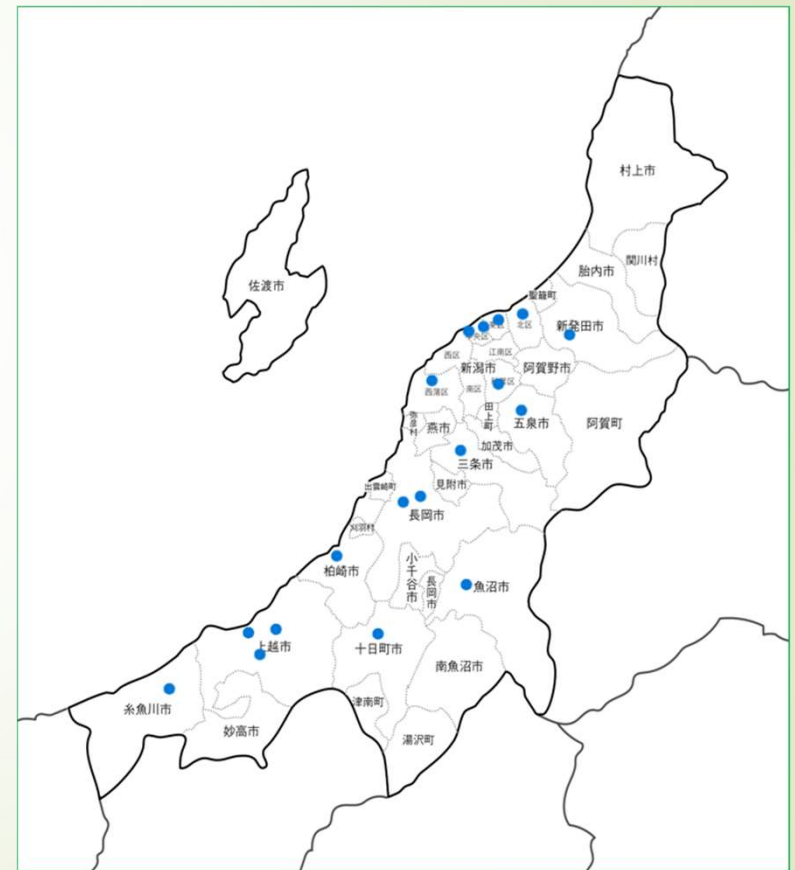
～発達段階に合わせた指導の工夫～

新潟県上越市立大町小学校
久我 かおり

はじめに

新潟県の難聴通級指導教室について

- ・新潟県の難聴通級指導教室は、全部で18教室ある。
- ・すべての市町村にあるわけではないが、地域の学校に設置されており、難聴に関わる自立活動を担っている。
- ・上越市には大町小学校に2教室、直江津小学校に1教室ある。
- ・それぞれ城北中学校と直江津中学校を兼務校としているので、中学生の指導も行っている。
(令和8年9月現在、大町小37人、直江津小19人)
- ・週1～月1回、個別指導を行っている。
- ・難聴のある仲間との交流を図るために、グループ学習も学期1回程度行っている。



難聴通級指導教室で行っている指導内容と流れ

小学生	中学生
聴覚学習	
言語指導・語彙の拡充	難聴理解・自己理解
コミュニケーション力の育成	
心理的ケア	
周囲への周知と働きかけ・合理的配慮	

年齢別 難聴理解・自己理解で目指していること

小学生

自分の聞こえに関心をもつ
聞こえにくい時があることに気付く

聞こえにくい時、周囲に聞くと良いことが分かる
聞こえにくい時の工夫を知り、周囲の大人に助けられながら行ってみることができる

周囲の大人に助けてもらいながら、聞こえにくさに自分なりに対応することができる
周囲に理解を求めたり、協力してもらったりすることができる

中学生

新しい仲間に難聴について伝え、理解を求めることができる
自分で考えたり工夫したりして、聞こえにくさに対応することができる

今までの経験から、自分にとって有効な合理的配慮を理解する
自分の力を発揮するために、周囲に理解を求めたり、自ら工夫したりすることができる

実践Ⅰ 小学校高学年 難聴理解授業を通して学ぶ

難聴理解授業の目的

難聴であることは見えないので、周囲の人に聞こえにくさからくる困難性を理解してもらいにくい。

難聴あるあるベスト3

- ・ 周りがにぎやかなところでは聞き取りにくい
- ・ 小さな声は聞き取りにくい
- ・ よく分からなくても、返事をしてしまう

難聴児が安心して生活するには周囲の理解が不可欠！

＜周囲の仲間＞

- ・ 理解授業を通して正しい知識を得て、理解を深める
- ・ お互いを認め合い仲間になる

＜難聴児＞

- ・ 友達と一緒に理解授業を聞くことで、自分の難聴について理解する
- ・ 学校生活における自分の状況を考える機会になる

対象児：小学校 4 年生

A児 右耳中等度伝音性難聴 現在は補聴器無し

B児 両側軽度～中等度伝音性難聴 現在は右耳のみ補聴器装用

C児 両側軽度感音性難聴 両耳補聴器装用

- ・ 3人とも週1回45分の個別指導を行っている
- ・ 在籍校は4年生が 2 学級あるが、 3 人とも同じクラス
- ・ 今のクラスは 3 年、 4 年持ち上りのクラス
- ・ 5 年生に進級するとき、クラス替えがある



それぞれが補聴器を装用し始めた時に、クラス担任から話を
してもらっていたが、難聴理解授業をしたことはなかった



- ・ 学年どちらのクラスも、授業中賑やかで落ち着かない
- ・ クラス替えをしたら、今まで関わっていなかった友達とも
過ごすことになるので、学年全員に理解してもらった方が
良いのではないか



10月末の個別面談時に保護者に提案
保護者は実施を希望

① 個別指導の時、周囲への開示と理解授業について、それぞれの気持ちを聞く



少人数なら大丈夫
だから、しなくて
いい



話す相手と場所を
選んで話せば大丈
夫だから、伝えな
くてよい



よく分からない

- ・ 自分から働きかけて周囲に協力してもらう経験がほとんどない
- ・ 理解授業がどんなもので、何が得られるのか想像ができない



理解授業の実施には後ろ向きな意見しか出てこない

② グループ学習を実施して、みんなで相談する

- ・ 学校で聞こえに関して困っていることを出し合う
- ・ 自分はまわりの人にどうしてもらいたいかを話す
- ・ 学校で安心して過ごすための方法を相談する

<困っていることは>

困っていることは
特にない



どっちでもいい

<困っていることは>

話し合いの時、周り
がうるさいと相手の
話が分からない



話を聞いてもらえ
ると安心するかも。
やってもいい

<困っていることは>

友達の声が小さいと
聞こえない



知ってもらえると
いいかも。
してみようかな

友達の意見を聞いて、少し気持ちが変わる

③ 事前に授業内容を確認する

- ・実施する前に、授業の中で自分はどのようにかかわるかを確認する
(名前を伝えるか、自分でも話をするかなど)



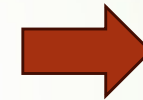
もう、気付いているかもしれ
ないから伝えない



恥ずかしいから
伝えないでほしい



ちょっと嫌だから
伝えないでほしい



個人名を出したり、子ども
たちに話させたりはしない
ことにした

- ・それぞれが友達に伝えたいと思っていることを確認する
- ・子どもの意見をもとに作成した理解授業のパワーポイントを見て、
意見を出し合う



④ 難聴理解授業を実施

<工夫したこと>

- ・参加しているすべての子どもに客観的に捉えてもらうために、難聴の子ども役を人形にさせて意見を言わせる。
- ・自分ごととして捉えられるように、難聴体験を入れたり、ワークシートに自分の考えを書かせたりする。
- ・難聴児を特定するような表現を避け、難聴についての一般的な知識を正しく伝えるようにする。

～授業後、その場で書いた振り返りから～

<きこえの話を聞いてこれからしようと思うこと>

<学年の児童の振り返り>

- ・これからは、「ま」前から話して、「ゆ」ゆっくりはっきり話して、「ひ」一人ずつ話していこうと思った。
- ・「もう一回話して」でおこらないようにします。
- ・聞こえづらいと、いろいろと大変なことがあると感じました。
- ・「ま」「ゆ」「ひ」を大切にしようと思った。
- ・周りがうるさいと聞こえないことが分かった。

<3人の振り返り>



聞こえがんばる



話している人をよく
見てコミュニケーションとる



「ま」「ゆ」「ひ」
を意識したい

⑤ 事後に理解授業を振り返り、話し合う

授業後の通級指導の時、記入した振り返りシートを見ながら話し合う。

<感想>



ふつう
耳のことはよく分
かった。



授業の後、友達から
「そうだったんだね」
と言われて、安心した。



みんなに聞こえのこ
とを知ってもらって、
うれしかった。

日常が大きく変わらなくても、わかってくれた人が増えた
ことで、安心につながった。

この学習を通して得た子どもの学び

<この学習から学んでほしかったこと>

- ・みんなにしっかり伝えれば、分かってくれること
- ・周囲が理解してくれると、安心すること
- ・自分が日常、聞こえについて困っていることは何か、
また、それを解決するためにできることは何かを自分自身が知ること
- ・周囲に協力を求めて良いこと



分かってくれたことの
安心感

自分の耳についての
理解

- ・得た学びは一人一人違う
- ・今回の経験をベースにして、学習を重ねていきたい。



実践2 中学生 職場体験学習を通して学ぶ

職場体験学習について

<上越市の場合>

- ・市内の中学2年生が、地域の事業所の協力を得て、キャリア教育の一環として行っている体験学習
- ・体験先は本人の希望を踏まえたうえで、学校が決定する
- ・体験日数は3日間。事業所によって少ないところもある
- ・体験先には事業所の受け入れに合わせて複数人配置される

☆通級指導でも、体験先で力を発揮できるよう、事前に体験先を確認して、配慮してもらいたいことや自分が気を付けることを話し合っている。



対象児：中学校2年生

D児 両側高度感音性難聴 両耳補聴器装用
小学校時は通常学級に在籍し、難聴通級指導教室で指導を受けてきた。
聴力の低下に伴い、中学校では難聴特別支援学級に在籍
難聴通級指導教室も教育相談で週1回50分個別指導している

主要教科以外は交流学級で学習しているが、学級の生徒とはほとんど関わっていない。

聴覚を活用しており、手話や筆記を使うことはない。

日常使うような言葉を近くから話されたときは聞き取れることが多い。



日常、ほとんど関わったことのない友達と一緒に体験学習をするため、担任はどのように配慮をすればよいか悩んでいた。



通級指導に生かすため、定期的に行っている授業参観時、難聴児の聞こえにくさを体験してもらえるように、担任にイヤーマフを着けて聞いてもらった。



「この疑似体験を学級の生徒たちにも体験してもらい、D児の理解につなげたい」と担任から希望があった。



職場体験学習の前に、難聴理解授業を実施することにした

①難聴理解授業について

本児と理解授業について話し合った。

＜本児の意見＞

- ・実施することは嫌ではないが、自分の名前を出したり、自分が話したりすることは恥ずかしいから嫌。
→一般的な難聴の話で展開することです承した。
- ・日常的に聞こえにくさは感じているが、普段、学級の生徒と関わっていないので、周囲に伝えたいことが浮かばなかった。
→今まで学習してきた聞こえにくさへの対応などを参考に、伝えたいことを話し合った。

☆事前に本児と保護者にパワーポイントを確認してもらった上で、難聴理解授業を行った。

②難聴理解授業の実施

<工夫したこと>

- ・ 難聴の基礎的な知識、イヤーマフや耳栓を使った難聴体験、高周波域をカットした音源を聞く難聴体験を組み合わせで行った。
- ・ 学校生活で生かすだけでなく、職場体験学習の受け入れ先で出会う人との関わりでも役立つように話した。

<授業の様子から>

- ・ 生徒たちは集中して話を聞いていた。
- ・ 班ごとにイヤーマフや耳栓をしてしりとりをしたとき、本児の班では、本児にしりとりの言葉が伝わらず、相手の生徒が困惑していた。通級担当者が、そばにいたので、「身振りを付けてみて」、「書いてみて」などアドバイスをしたところ伝わった。

③ 難聴理解授業を終えて

授業後、本児と振り返りシートを使って話し合った。

友達が書いてくれた感想を読んだ後、次のように書いた



ちゃんと分かってくれて、よかった。
自分はこれから人の話をよく聞けるようにする。

- ・ 理解授業をして理解者が増えたことで、安心して学校生活を送ることができると感じた。
- ・ 自分ができることをやってみようという気持ちになることができた。



④ 職場体験学習に向けて

職場体験学習の前にワークシートを使って話し合った。

<シートの中の主な設問>

- ・ 体験期間
- ・ 体験先
- ・ 体験先までの行き方、交通手段
- ・ 一緒に体験するメンバー
- ・ 体験先で自分の聞こえについて伝えるか
伝えるときには誰にどのように話すか
なぜ、伝えるのか
- ・ 体験学習に向けての気持ち

⑤職場体験学習での様子

- ・ 本児の体験先は結婚式場があるレストラン
- ・ 実習には同じクラスの女子3名と参加
- ・ 実習内容は
レストランの清掃
レストランの接客（二人一組 運ぶ人、出す人）
- ・ 実習先のチーフには難聴があることを自分から伝えた。

<本児が実習で学んだこと～記録から>

- ・ 敬語を使うことを気を付けた。
礼などをちゃんとして、失礼のないようにした。
- ・ とても疲れたけど、声のトーンで相手に気持ちが伝わる
ことが分かったり、返事のやり方などが分かった。





この学習を通して得た子どもの学び

☆人と関わることの楽しさ

- ・ 普段、クラスの友達とほとんど会話をしない本児が、レストランの接客を楽しんでいることができた。
- 理解授業を行ったことで、クラスの仲間と関わることへの不安を取り除くことができた
- 自分のできることをやってみたら、うまくいったという成功体験を積むことができた
- 自分がやってみたい仕事の幅が広がった。

成果と課題

＜難聴通級指導教室の役割＞

- ・それぞれの事例において、児童や生徒は難聴理解授業に向けて行った一連の学習を通して、自分の聞こえにくさに向き合うことができた。聞こえにくい自分を受けとめ、どうすれば自分の力を発揮できるのかを考えるきっかけにすることができたと思う。
- ・子どもたちが、はじめはためらったり不安に思ったりして行動に移せなかった時、担当者が子どもたちの気持ちを大切にしつつ、背中を押して次につなげるように働きかけたことも重要なことだったと考える。
- ・きこえの教室は、学校教育の中の自立活動を担っている。
学校にあるからこそ、在籍校と連携し、子ども達が抱える課題や困難性を適時に細かく見つけ、そこに対応する力を育てることができる。
新潟県は難聴通級が地域に根ざしていることで、さらに丁寧に子どもたちの心に寄り添い自立活動を展開することができる。
この利点を生かし、子ども達がより生活しやすくなる支援を考えながら、これからも通級指導を行っていきたい。

＜難聴通級指導教室の課題＞

- ・ 難聴児が抱える課題や困難性を改善していくためには、子どもたちの生活全般を理解し、方策を考えることが必要である。そのためには、学校での様子や、日常生活についての情報を、在籍校や家庭と共有することが大切だと考える。現在も、定期的に在籍校訪問や支援会議を行っているが、十分とは言えない。さらに子どもたちが安心して生活できるよう支援していきたい。
- ・ 難聴通級指導教室は県内に点在しているため、指導について相談したり、研修したりする場が少ない。情報共有や研修のために月1回オンラインで行っている県内の難聴通級指導教室担当者会をこれからも継続していきたい。
- ・ 難聴通級指導教室は小・中学校にしかないため、支援しきれていない高校生の支援についても、地域でできることを模索していきたい。